

に限らずベテランまで、明日から使える臨床技工のノウハウを学べることは貴重な経験である。そこで、本科でも金属床の実習を行っていることから、キャストパーシャルデンチャー特論の知識や技術を応用したいと考えた。そして、平成21年度から一部取り入れて実習を組み立てて実施したので、その内容を紹介した。

## 英語リーディングについて

廣瀬浩二（歯科衛生士学科）

リーディングは書き手と読み手のコミュニケーションであるという観点から、リーディングの重要性について発表した。英文をスムーズに読むには、約1万語が必要だといわれている。アメリカ人は小学校入学段階で既に約6千語の語彙を獲得している。しかも、これらの語彙は口頭で使用できるレベルにある。それに対し、日本人は中学校3年間でわずか900語程度である。語彙数からみて、日本人が読めないのは当然の帰結といえる。語彙力の他にも、日本の学校ではパラグラフ構成についてあまり教えていない。これは日本人が英語を読めない、書けない理由の一つだと考えられる。CLT（Communicative Language Teaching）は全盛でスピーキングにスポットライトがあたりがちであるが、確かな英語力を養うにはリーディングは避けられない。これまで日本の英語教育では、外国の指導法を直接導入することが多かったが、日本の環境に適する指導法を独自に開発する時期に来ていると考える。

第45回（通算第128回）：2010年6月24日（木）

（座長：栗崎由貴子）

## 歯科衛生士学科『歯科補綴学』合同 体験実習の取り組み

西山真紗美（歯科衛生士学科）

歯科補綴治療において歯科衛生士が歯科診療補助を確実に行うためには、歯科医師の診療行為を十分に理解するとともに知識・技術を確実にする必要がある。そこで、平成21年度より、歯科衛生士学科2・3年生を対象とし、実施頻度の高い概形印象採得および咬合紙診査の学生参加型合同体験実習を行ってきた。その結果から問題点の把握と改善を行い、平成22年度の学生参加型合同体験実習を企画し、効果と課題を検討した。

学生指導者役である3年生の増員により、2年生の実習への満足度が上がった。3年生は平成21年度に合同体験実習を経験していたため、学生指導者役としての意欲が高かった。また、学生指導者役の実験は、自分の力量を知るとともに、責任感をもつことが示唆された。

今後は、他の実習においても学生指導者役となる機会を与え、知識や技術のレベルアップにつなげ、患者への歯科保健指導や集団における歯科保健教育に活かせる指導力を育成することが必要である。

第46回（通算第129回）：2010年7月22日（木）

（座長：飛田 滋）

## マウスガードの応用

佐々木 聡（歯科技工士学科）

2006年7月22日の第22回（通算105回）の月例研究会で「マウスガードの機能評価」について報告した。今回はマウスガードの応用編として、口腔内リモートコントローラへの応用、楽器奏者における機能評価について報告した。試作1号としてカラーマウスガード4.0mm、エルコデント2002（共にエルコデント社）を用いて下顎に全歯歯冠部のみを覆うタイプで製作した。自宅で演奏時に気になる部分（臼歯咬合面部や唇頬舌側部の厚さ）があり、前歯歯冠部のみを覆い、唇舌部を可能な限り薄くしたタイプを試作2号とした。試作2号は、切縁の厚さが気になり、厚さ1.0mmのエルコフレックス（エルコデント社）をみたび製作し、試作3号とした。試作3号はかなり良好な装着感とのこと。試作3号に慣れてもらうため、3ヶ月間演奏時には必ず装着してもらった。マウスガード試作3号に慣れたころ試作3号の装着有り無しで演奏を録音し違いを確認したが、確認出来ず、会場内の皆様から活発なご意見をいただいた。

## 障害学生の修学支援—発達障害を 中心に—

入山満恵子（専攻科保健言語聴覚学専攻）

近年、「発達障害」が様々な教育活動のなかで取り上げられつつある。その論議は、小・中学校のような義務教育の課程だけでなく、大学、短期大学のような高等教育機関においても広がりを見せてい

る。文科省が平成14年に行った調査では、「通常の学級に在籍し、特別な支援を必要とする児童生徒数が全体の約6%」であるという。この数字は、この子どもたちが成長し、進学していく先である高等教育機関にもやはり変わらず支援を必要としているであろう学生の存在を暗に意味していると考えられる。したがって、我々も「発達障害」についての正確な知識を持ち、どのような教育的指導が最も効果的かを考える必要がある。今後の高等教育機関は、従来の指導に加えて、今まで以上にきめ細かい「個への指導」も問われる時代になると考えられる。さらに、このような配慮を充実させることが今後の退学者の防止や入学者数の増加にもつながると期待できる。

第47回 (通算第130回) : 2010年9月30日 (木)

(座長: 小黒 章)

### 読み書き障害児の支援 —AAC・ATの活用—

渡辺紗江子 (ことばクリニック)

現在小中学校の通常級には、学習・行動面で困難を抱える子どもたちが6.3%在籍していると言われている。全般的な知的発達には問題がないのにも関わらず、中枢神経系の何らかの機能障害が原因で、学習に困難を示す例として「読み書き障害 (ディスレキシア)」が挙げられるが、今回はその障害について、障害の定義・読み書き障害児が示す症状・抱える問題・学校現場の現状等について説明した。

マルチメディアDAISY版教科書やサウンドリーダー等、支援機器は徐々に普及してきてはいるものの、それらはもともと視覚障害者のために作られたものが主で、読み書き障害児が本当に使いやすいような機器の開発は依然として進んでいない、というのが現状である。機器を使用した支援の実際について、ことばスクールで担当している中学1年生男児の事例を交えつつ紹介し、支援教育の動向・読み書き障害児の支援の発展・今後の課題について述べた。

### 本科卒業生の歯科技工からの離業状況 について

相馬泰栄 (歯科技工士学科)

歯科技工士から他業種への転職 (離業) 率が非常に高く、卒業1年以内に30%、3年で50%、5年で75%の人が転職しているとの報告がある。本科を平

成19年3月に卒業し、就職あるいは進学した45名の内、1年以内での転職者は17.8%であった。転職理由は歯科技工が向いていなかったと職場環境、労働条件が悪かったなどであった。反面、満足している理由としては職場や労働条件が良いや色々な奨励をやらせてくれるなどであった。職場に対する満足度や勤務継続の意思は職場環境や労働条件が大きく影響していた。また、平成21年3月に就職あるいは進学した44名の1年後の転職率は15.9%で、平成19年3月の卒業生と比較しても転職率や転職理由に大きな違いは見られなかった。平成19年3月の卒業生の卒業3年以内での転職者は42.2%と大幅に増加し、転職者の73.7%が女性であった。本学では歯科技工士希望者の約半数は女性であることや歯科技工からの転職者がその後、戻っていないことから職場での受け入れ態勢の整備と労働条件の改善とが強く望まれるとの結論に至った。

第48回 (通算第131回) : 2010年10月28日 (木)

(座長: 金子 潤)

### H22保険改定について

市川伸彦 (附属歯科診療所)

春川麻美 (附属歯科診療所)

今年度は社会保険診療報酬の改定があり、歯科は2.09%のプラス改定でした。しかし、診療の評価に所要時間という時間要件がつけられている状況は変わっていません。時間要件のために、正当な評価が得られていない訪問診療がどれくらいあるのかを、事例から調査しました。附属歯科診療所における訪問診療について、改定前後の約1年半の期間の記録から、所要時間の調査をしました。100例の訪問診療における所要時間の分布を調べました。今改定では、時間要件の緩和がなされたため、以前よりも訪問診療としての評価を受けるケースは増加しました。しかし、依然として25%程度は、時間要件のため、実際に行われた訪問診療行為が、正当に評価されていないことがわかった。実際に行われた訪問診療が、所要時間によらず正当に評価される制度となることが望まれます。